HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	パウロ『ローマ書』の構成と試訳（二〇〇八年六月改訂版）
Author(s)	千葉, 恵
Description	この論文に対し、2013年3月に改定版が発表されています。
Issue Date	2008-06
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33953
Type	journal article
File Information	roma08_6_23.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

パウロ『ローマ書』の構成と試訳（二〇〇八年六月改訂版）

千葉　恵

序

本書簡におけるパウロの思考様式の特徴は、ナザレのイエスにおいてユダヤ人のみならず人類全体にとって比類のない救いが出来事になった、つまりイエスがキリストであるというその一つの出来事に眼差しを注ぎつつ、旧約聖書との連関のなかで、また他の諸文化とも共約可能な語用を援用しつつ、福音を宣教したことにある。しかも福音の宣教が、同時に、彼の論敵とりわけ律法主義者、ユダヤ主義的キリスト者に対する論駁になっていることにある。なぜなら、パウロによれば、イエス・キリストの出来事は業の律法による支配を終わりにし、異邦人にもユダヤ人にも開かれた救いの訪れだからである。すなわち、パウロにおいて「イエスが主である」との宣教とはその出来事において啓示された神のユダヤ人そして異邦人に対する認識、判断そして行為を伝達することであり、しかもその宣教という言語行為そのものが論敵の挑戦に応答するそのような思考の展開となっている。

従って、この翻訳の試みにおいて、パウロがイエス・キリストの出来事に集中して紡ぎだす言葉は、まず神によりその語、文により理解されていることがらを指示することを意図しており、その神の人間認識、判断の啓示に伴い、人間の心的状態がそれに随伴しても構わないが、基本的にはパウロは神の前の人間の現実をまず開示していることを念頭において訳出した。また、彼がこの出来事の上に立つ信徒の自己認識、希望の生について記述するとき、そこでも眼差しはイエス・キリストにおいて神によって理解されている自己との関連で生身の自己に眼差しが注がれ言葉が紡がれていることに留意した。他方、命令形の使用に見られるように、彼において切り開かれた新しい現実に生きることも古い自己に留まることも可能なローマの信徒に代表される自由と責任のもとにある生身の人間に眼差しを注ぎつつ言葉を紡ぐときは、他の文化とも共約可能なパウロによる人間一般の認識が前提にされていることに留意した。彼は宣教を通じてすべての異邦人にも福音が共約的なものとなることをめざしている。

『ローマ書』の構成

第一部　一章～六章　律法とイエス・キリストにおいて二つの様式において啓示された神の義と、そのもとにある神の前の罪人と義人。罪人と義人の可能存在としての命令法のもとに語りかけられるローマの信徒に代表される生身の人間。

一章・一節～一五節　ローマの信徒への挨拶

一～六　自己紹介。使徒であることとその職務（異邦の民への「福音」すなわち神人イエス・キリストにおける救いの出来事の宣教）。

七　ローマの信徒への挨拶

八～一五　ローマ宣教の計画と目的。

一章・一六～一七　主題の提示。神の義、福音、信そして救いの関わりの要約的言明。「神の義は福音において[ご自身の]信実に基づき信仰に対し啓示されている」。

一章・一八～三章・二〇律法のもとにある人間の神の前の現実。神が義であることの第一証明、律法を通じた神の裁きによる証明。

一八～三二　神の神性の自然による啓示に対する不敬虔者に弁解の余地がないこと、その結果としての性的放縦はじめ、もろもろの欲望への引渡しとしての怒りの啓示。

二章・一～一六　誰の心にも律法の業が書き込まれていることは最後の審判の日に良心が共同の証人となり明らかになること。それ故に、ユダヤ律法の知と無知にかかわらず、律法を行う者が義とされること。「神はおのおのにその業に応じて報いるであろう」。

一七～二九ユダヤ人は「律法に知識と真理の型」があるとし、律法を誇りつつ違反し、神を侮辱していること。

三章・一～八　ユダヤ人の優越と罪をめぐり神の信実そして神の義を疑う論敵への反駁。

九～一八　義人がいないことの（旧約）聖書に基づく論証。

一九～二〇　律法の存在理由。業の律法に基づいては誰も神の前で義とされないことを明らかにし、神に服させること。

三章・二一～六章・一〇　イエス・キリストの信を媒介にした神自身の信実と義の啓示。「イエスの信仰に基づく」と神に認定される者の義認。この啓示に基づき、人間は誰もが信仰により神に義と認定されることの主張。旧約聖書における歴史的先駆者たちの福音の啓示への重ね描きないし啓示に基づく再理解。信仰義認の先駆の提示として旧約からの論拠の提示。および義認の根拠としての復活。さらに、この恩恵の上に立つ者の信仰における希望と喜び。

二一～二六　主題（一章・一六、一七）の展開・その一、イエス・キリストの信。

イエス・キリストの信を通じての神の義と義認の啓示。神が義であることの第二証明（福音による）。罪人であるすべての人間に対し忍耐と寛容を持ち続けた神がイエス・キリストの「贖い」の出来事を通じて「無償で」「イエスの信仰に基づく者」を義とする。信仰義認論の根拠としてのイエスの信仰。

二七～三一　主題の展開・その二　すべての人間は信仰により義と認定される。

業の律法を離れ信仰により義とされるという啓示の出来事からの信仰義認の推論。「われらは、人間は業の律法を離れて信仰によって義とされると認定する」。この義認論はすべての人間に妥当する。「それとも、神は[業の義を求める]ユダヤ人だけの神であるのか」。神は唯一の神であり、異邦の民が業を離れて信仰を媒介にして義とされるように、割礼の業を行うユダヤ人も信仰に基づき義とされること。そして業を離れた信仰を通じて「律法を無効にするのではなく」、

「律法[における神の意志]を確認する」。

四章・一～二四　信仰による義認の（旧約）聖書に基づく論証および義認の根拠としての復活。歴史的生身の先駆者の福音の啓示への重ね描き。

ユダヤ人の先祖アブラハムとダビデにおける信仰義認。「働きのない者であり、不敬虔な者を義とする方を信じる者には、彼の信仰が義と認定される」。

主イエスを死者から甦らせた方を信じる者の義が「彼（アブラハム）には義と認定された」という発言に含意するよう「意図」されている。「主イエスはわれらを義とするために甦らされた」。

五章・一～一一　信仰に基づき義と認められ、平和を持しているからこそ、信徒は信仰において恩恵に近づきを得ている。罪人との「和解」という「神の愛」を聖霊の注ぎにより受け義と認定された信徒の平安、希望そして喜び。

一二～二一　ひとりの罪過を介した罪の定めに対抗するひとりの義を介した生命の義の満ち溢れ。恩恵がイエス・キリストを通じて永遠の生命に至るべく義を通じて支配する。

六章・一～三　罪が増すところ恩恵が満ち溢れるなら罪に留まろうと主張する論敵への反駁。キリストの「生命の新しさ」のなかに歩むべく「彼と共に埋葬された」。

四～一〇　キリストの死は罪に対する最終的な死であり、彼の復活の生は神に対する生。イエス・キリストにおける生と死に対する、その似様性における「一致」。啓示に基づく知識主張。「キリストは死者のなかから甦らされてもはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことをわれらは知っているからである」。

六章・一一～二三　イエス・キリストの信を媒介にして義とされたことを受けて、新しい生に関する使徒による信徒への命令と永遠の生命獲得への励まし。

一一～一四　四つの命令。イエス・キリストの生と死が信徒自らのものであるという恩恵がいかなるものであるかの論証を経て、今や使徒は新しい生がいかなるものであるべきかをローマの信徒に命令する。（命令形は受け手がそれに従うことも従わないこともできることを前提にしている）。

一五～二三　恩恵のもとにあるのだから罪を犯そうと主張する論敵への、罪から自由にされ義に奴隷とされた事実に基づく反駁。「汝ら知らぬか、汝らが自らを奴隷として従がうべく捧げるその者に、死に至る罪のであれ、義に至る従順のであれ、汝らは汝らが服従するその者にとって奴隷であることを。・・われ汝らの肉の弱さの故に人間的なことを語る」。罪と義双方の「奴隷」という表現は「人間的な」語りであり、義と罪双方に対する可能存在としての人間の確認。啓示に基づく永遠の生命の主張。「今や、汝らは罪から自由にされ神に仕えており、聖なるものに至る汝らの果実を持している。その終局は永遠の生命である」。

第二部　七章～八章　魂の二重構造。身体を持つ者の生の自然的原理である「肉に即した歩み」と死すべき身体を介しての「霊に即した歩み」。

七章・一〜二五　業の律法とは別に福音の啓示を受けて、律法の新しい役割と新たな位置づけ。律法のもとにある人間はいかなる状態にあると神に理解されているか。罪の苦悩。

一〜六　「キリストの身体を通じて律法に死んだ」。律法から解放され、「霊の新しさ」において、神に「実を結ぶ者」となる。

七〜一二　律法は罪ではないかという論敵への反駁。律法の新たな位置づけ。一方、罪は律法を利用しひとを欺くが、他方、律法はその欺きを通じて、罪を明らかにし、ひとに罪の自覚を促す。

一三〜二四　罪の苦悩。聖にして霊なる律法に同意する「われ」と欲せざる悪を為すわがうちに宿る罪の争克。罪のもとに売られている「われ」＝「人間」がいかに「惨め」か。

二五　「われ」の二重性。「洞観において神の律法に仕え、他方肉において罪の律法に仕える」。

八章・一〜三八　霊に即した生はいかなるものか。被造物全体の身体の贖いと御霊の執り成しそして神の子の栄光へ。

一〜三　生命の霊の法則による罪と死の法則からの解放。「キリスト・イエスにある」と神に理解されている信徒はいかなる状態にあるか。「いかなる罪の定めもない」。なぜなら、「神は自らの御子を遣わし・・肉のうちにある罪を罰した」からである。

四〜一一　「霊に即して歩む者」と「肉に即して歩む者」の対比。律法の義の要求は前者により満たされる。「キリストが汝らのうちにあるなら、かたや身体は罪の故に死であるが、霊は義の故に生である」。霊に即して歩むとき、死すべき身体も生きるものとなるであろう。

一二〜一七　神の霊に導かれる者は「神の子」と呼ばれる。

一八〜三〇　被造物の呻きと聖霊の執り成し。霊の初の実を持つ信徒も身体の贖いを待ち望みつつ呻いている。聖霊が呻きをもって執り成している。

「神は予め定めた者たちに呼びかけそしてその者たちを義とし、さらに栄光を与えもした」。

三一〜三八　イエス・キリストにおける神の愛から信徒を引き離すものは何もない。

第三部　九章〜一一章　業ではなく恩恵により神から賜る義と救いをめぐるイスラエルと異邦の民の歴史の帰趨。

九章・一〜一一章・三六　福音において啓示された異邦の民の召しと義認と栄化を受けて、イスラエルの歴史はこの出来事といかなる関わりにあるか。

一〜五　使徒のイスラエルに対する願い。

六〜一八　（旧約）聖書における神の選びの系譜。

一九〜二九　神の自由と忍耐そして憐れみ。「怒りの器」への寛容と忍耐そして「憐

れみの器」にご自身の栄光の富を知らしめる。
三〇～一〇章・二一　イスラエルの躓き。義を業の律法により追求する神の義の誤解および神の義への不服従。律法に基づく義と信仰に基づく義の（旧約）聖書における対比。「信仰の言葉」＝「言葉は汝の近くにある、汝の口にそして汝の心にある」。聞くこと、宣教することそして聞き従うこと。
一一章・一～一二　イスラエルの救済の可能性の論証。
一三～二四　異邦の民へのオリーブの木の接木による警告。
二五～三二　イスラエルの救い。
三三～三六　神の救済の知恵に対する賛美。
第四部　一二章～一六章　福音が出来事になったからこそ命じられうるキリストの身体としての信徒の生。
一二章・一～一五章・一三　神への聖なる献げものとしての生がいかなるものであるかのローマの信徒への指針と勧め。
一～二一　キリストにあって一つの身体である信徒の異なる賜物の愛による使用。
一三章・一～七　神の補佐として派遣されている現今の政治権力への服従の勧め。
八～一〇　愛が律法の成就であること。
一一～一四　光の武具としてのイエス・キリストを着ることにより闇の業に打ち勝て。
一四章・一～一五・一三　信仰において強い者と弱い者をめぐる勧め。
一～一六　食物と特別な日をめぐる争いに対する調停。
一七～二三　躓きの克服としての神の国と信仰の何であるかの確認。「汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持て」。
一五章・一～一三　キリストを模範とする勧めと信徒がキリスト・イエスにおいて同じ思いを持つよう神への祈願。
一五章・一四～一六章・二三　使徒からローマの信徒への今後の計画および祝福。
一四～二一　使徒自身の宣教の働きの理解を求める。
二二～二九　ローマ旅行およびエルサレム経由の理由。
三〇～三三　祈りの結集への呼びかけと祝福。
一六章・一～二三　付録―紹介状。

凡例

一、底本に NESTLE-ALAND NOVUM TESTAMENTUM GRAECE 27revidierte Auflage(Stuttgart 1993)を用いた。THE GREEK NEW TESTAMENT Third Edition(corrected) ed. Kurt Aland et alter, (United Bible Societies 1983)を参照した。両者のあいだに語彙上の読みの差異はない。大文字と小文字、句読点および旧約の引用箇所の理解に差異がある。頌栄（一六章二五―二七節）は後の加筆であり訳出しない。

二、[・・]は訳者による補いである。

三、旧約聖書からの引用は NESTE-ALAND 版に従い、引用文は「・・」により示した。（ただし、三・八、四・二五、八・一五、九・一九、一一・一九の直接文は旧約聖書からの引用ではないが「・・」を付した）。

四、pistis（ピスティス）の訳語「信実（faithfulness）」および「信仰（faith）」「信(faith/faithfulness)」について。パウロは一方、「神のピスティス」（三・三）を語る。神はユダヤ人に対し、彼らの不信仰、不信実と対照的に、ご自身の「言葉」を「信任」し、「偽り」を言うことなく「真実」であり、約束に忠実であったという文脈において、神に帰属するひとへの心的態度として「ピスティス」が用いられている。なお基本的には人間の心的態度である信仰を神に帰属させることはできないので、この箇所を「神の信実」と訳す。

パウロは、他方、神に対するひとの一つの心の状態、つまりひとがその知識に到達してはいないなかで、それを真であると信じ、自らの側で持つ神への信頼、信実、誠実等を含む心的状態に「ピスティス」を用いる。そこでは「ピスティス」について「強弱」（一四・一一）や「成長」（第二コリ、一〇・一五）を語ることができ、それは個々人により差異がある。これには人口に膾炙している「信仰」の訳語を与える。

パウロは神の信実とひとの信仰に同一語を適用することに問題を見出してはいない。なぜなら、彼はこの語の根源的使用をイエス・キリストの出来事に定め、そして他の一切の自らの使用をそれとの何らかの関連において理解したからである。イエス・キリストの出来事は人類にとって預言されてはいたが未経験の比類なき救いの出来事であり、これを表現する新しい語を必要とした。新星の発見者にその星の命名権が属するように、パウロは自らの発見を「イエス・キリストのピスティス」（三・二二）と表現した。このピスティスは神とナザレのイエスというひと双方のピスティスを含意するため「信」と訳す。「神の義はイエス・キリストの信を通じて信じるすべての者に明らかにされている。というのも、[信じるすべての者のあいだに]何ら差異は存在しないからである」（三・二二、二

三）。ここでは、信徒の信仰に何ら差異がないところの信が問題になっている。従来「信仰」と訳すことのできた語をこの箇所で用いたのは、イエス・キリストに帰属した神の信実とその信実に対応するナザレのイエスの信仰の出来事それ自身の含意することがらのゆえにである。神の信とひとの信がそこで出会ったのである。

職名「キリスト（受膏者・救い主/Annointed One）」を伴う固有名「イエス・キリスト」は固有名「イエス」（例、三・二六）や「キリスト」（例、一四・九、一五・三）と同一の存在者を指示するが、それぞれの名前は異なる文脈において用いられ、理解されるべき事柄つまり意味は異なる。「イエス・キリスト」は他の用法とは異なり行為主体（「イエス・キリストは（が）・・する（した）」）とされることはない。パウロは神でもひとでもある存在者に一つの行為を帰属させることができなかったからである。パウロはしばしば「われらの主イエス・キリスト」（例、一・四）という表現を用いるが、それは原始教団において確立した呼称であったと思われるが、「主（キュリオス）」は神のことであり、この固有名には神が含意されている。当時の宣教の目的は「イエスは主である」という告白に導くことであった（一〇・九）。

「イエス・キリスト」は常に場所や媒介の前置詞「において」や「通じて」、「即して」を伴い、媒介の範疇において理解されている。神はイエス・キリストを媒介にしてひとと和解したという理解は自然であるが、イエス・キリストがひとと和解したという言い方は不自然であることから分かるように、パウロは行為主体としてその固有名を用いることはない。実際、「神の子イエス・キリストは然りと否にならなかった、むしろ彼において然りがなったのである」（第二コリ、一・一九）と言われ、そこにおいて神の人間に対する肯定が出来事になった媒介者として用いられる。従って、「イエス・キリストの信」の属格「の」は従来の主格的（イエス・キリストが持つ信仰）でも目的的（イエス・キリストへの信仰）でもさらに「神秘的（神とひととの霊的交わりの）」属格でもなく、「媒介者イエス・キリストに帰属した神の信実とそれに対応するナザレのイエスの信仰」という意味で、帰属ないし出来事の属格と解すべきである。実際、主格的属格の理解は行為主体とされるため採用できず、目的的属格は信徒個々人の心的状態としての信仰が啓示の媒介にはなりえないため採用できず、神秘的なそれも信徒個々人の心的状態を含意するため採用できない。

他方、固有名「イエス」はパウロにおいてナザレのイエスの人間性を表現するために用いられている。ナザレのイエスは自らの責任ある自由において神への信仰のなかで使命を遂行した。それ故に「イエスのピスティス」（三・二六）は「信仰」と訳す。

「イエス・キリストの信」は神の前の現実として、神の義の啓示を媒介するも

のとして啓示されている。啓示の主体は神であり、啓示の遂行者はナザレのイエスでありそして啓示の対象と内容はその信の故に神が義であることであり、啓示の受けてはすべて信じる者である。このように、神による信実と義の啓示は歴史上の一つの実在として、われわれ自らの信仰を通じて認識されるべきものとしてある。ここで「信じる者すべて」における「すべて」において、ひとの心的状態としてどれほどの信仰であれば、信じる者に入るのかは問題とされていない。神が義であることを疑う者は知ることはできないという「信じる」と「疑う」が対義語であることからくる語用上の制約によるものである。「神が義である」ことが真であることを信じなければそう知ることはできないという一般的な信と知識の関係に基づく。

神の前の人間現実はイエス・キリストにおいて啓示されたものであり、ナザレの「イエスの信仰に基づく者」（三・二六）とは、人間イエスの信仰をご自身の信実に対応すると神は認定したが、それに基づくと神が認定するところの者のことである。「信じる者すべての」（三・二二）も同様に神にそう認定される者のことである。われわれは自らがイエスの信仰に基づいているかどうかは啓示されておらず、それは自らの側で持つ信仰により把握、認識すべきことがらである。パウロはそれを「汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持て」（一四・二二）と命令形で表現している。生身のひとは神の前の出来事つまりイエス・キリストにおけるわれわれの出来事をそのつど自らのことがらとして受け止めることができるだけである。神のイエス・キリストにおける判決においてのみひとは神に信実であることができる。このように、パウロは同一語により神の前の一つの事態（イエス・キリストにある神とひとの信）を表現したのである。

このように「ローマ書」における「ピスティス」には各人のあいだに差異がある心的状態としてのそれと、各人のあいだに差異がないイエス・キリストの信の二つの用法が見られる。その理由として、「ピスティス」には知らないから信じるという認知的要素と我と汝の或る等しさに生起する相互の信実という人格的要素双方が含意されていることが挙げられる。この後者の人格的要素という表現は普遍的に表現された場合のことであり、実質的には、「イエス・キリストの信」として明らかにされた歴史的な出来事に基礎づけられる。各人の強弱ある信仰が神によりイエス・キリストにおいて出来事になった信において、「イエスの信仰に基づく者」と理解される限りにおいて、信じる者たちは自らのあいだに「何ら差異がない」（三・二二）とされる。

パウロは自らの身体の限界であると考える傾向性を「肉の弱さ」（六・一九）としているが、ひとは身体を持つ限りその制約のなかにおり、知らないからこそ信じるという認知的要素を克服しきることはないが、認知的要素から人格的要素への移行こそピスティスの本来性への移行であるとしている。パウロ

は「汝が汝自身のがわで持つ信仰を神の前で持て」とこの移行を命じるが、この命令が可能なのはイエス・キリストの信が出来事になったことにある。彼は福音宣教の目的を「我が子らよ、キリストが汝らのうちに形づくられるまで、我、再び、生みの苦しみをする」（ガラテア四・一九）としており、個々人がキリストと共にあることが、肉の弱さの克服した状態である。「アッバ父よ」（八・一五）と時空の限界を超えて祈るイエスのように、神との父と子の人格的な関係はキリストが身体のうちに形づくられるという仕方で遂行される。

ひとが自らの全存在を神に託するとき、「あなたが存在するかどうか知らないが、あなたが存在することを信じます」とは言わない。J.H.ニューマンも「祈り」に関して「名高い諺「神よ、もし神が存在するなら、わが魂を救いたまえ、もし私が魂を持つなら」は信心の至高の尺度でもあろう。しかし誰が、その存在について彼が真剣に懐疑のうちにある存在者に現に祈ることができるであろうか」と言うとき、祈りのもつ人格的関係性に訴えている。そこでは認知的要素は問題にならない。魂の根源的変革が不可避であり、これまでの信念体系、認知構造(noetic structure)では生を遂行することができないという状況においては、ひとびとのあいだで伝えられてきた、差し出されている神の愛と信実を、「信じます」という仕方で、我と汝の回復ないし受容という人格的要素だけが問題になる。そこでのみ魂の根源的変革は遂行される。

しかし、その発話は声帯を通じて空気を振動させてしかなしえない。つまり、神の呼びかけに応答できる部分がすべてのひとに等しく（さもなければ恩寵とは言えない）備わっているとして、身体を媒介にしてしか信じるという行為を遂行しえない。その身体とは「肉の弱さ」がまさに属するところのものである。「肉」とは身体をもった自然的存在者の生の原理である。人間は身体性のゆえに、自らの身体の限界が自己の限界であると考えがちな存在者であり、それが「肉の弱さ」と呼ばれるものである。パウロは「汝らの肉の弱さのゆえに、人間的なことを語る」（六・一九）として、生身（なまみ）の存在者を譲歩として認めている。イエス・キリストにおいて啓示されている信の出来事が自己の信であるにしても、そのことを信じるという行為は肉を媒介にせざるをえず、認知的に制約のある身体性の媒介のゆえに、人格的要素だけが問題であることがらにも、認知的要素が混入せざるをえないのである。その事情の故に、パウロは二つの相においてあるピスティスをその一語において表現したのだと思われる。それは、身体への顧慮を含意し、グノーシスを回避している。身体もパウロにおいては神の喜ばしい愛の表現としての創造の産物なのである。

なお、アブラハムのようにナザレのイエス以前の旧約のひとびとのピスティスもパウロにおいてはこの根源的なピスティスとの関連で理解し直されている。彼らの心的態度が吟味されているために、そこでは「信仰」と訳す。また、一箇所

ローマの信徒とパウロ自身の人格的な関係を表現する場合に「ピスティス」が用いられるが、そこでは「信実」（一・一二）と訳す。

五、神による認識、判断、行為が客観的な仕方で叙述される場合には尊敬語を用いない。パウロ個人による神への願望、感謝そして賛美が含意されている場合には尊敬語を用いる。

第一章

キリスト・イエスの僕パウロ、神の福音へと定め分かたれ、召されて使徒なり。[二]その
の福音は聖なる書に彼の預言者たちを通じてはるか以前に約束されたものであり、[三]肉
によればダビデの子孫から生まれた彼の子について、[四]聖なる霊によれば死者たちの甦
りに基づき力のうちに神の子と定められた、われらの主イエス・キリストについてのも
のである。[五]われらはその御子を通じて彼の御名のためにすべての異邦の民のあいだで、
信仰の従順に導く恩恵と使徒職を得たのであり、[六]汝らもまたそのひとびとのなかで召
されてイエス・キリストのものである。[七]ローマにいる神に愛されたすべてのひとびと
に、召された聖徒たちに、われらの父なる神からそしてわれらの主なるイエス・キリス
トから恩恵と平安が汝らにあるように。

[八]始めに、汝らの信仰が全世界に告知されていることを汝らすべてについてイエス・
キリストによりわが神に感謝する。[九][一〇]それ、神こそ彼の御子の福音において、われわ
が霊において拝する、わが証人なれば。絶えざるわが祈りにおいて、われただちにいつ
かいかにかして神の御心において汝らのもとに赴きうるか祈りつつ、われ常に汝らに思
いを寄せる。[一一]なぜなら、汝らを強めるため何がしか汝らと霊の賜物を分かち合うべ
く、われ汝らにまみえることを、[一二]汝らとわれ互いの信実を介してわれ汝らと共に励
まされることを欲するからである。[一三]しかし、兄弟たち、われ汝らのあいだでも残り
の異邦の民におけると同じく、何がしかの果実を得るために、しばしば汝らに赴くべく
ことを進めたが、今日まで妨げられたのを汝らに知られずにいるのを欲しない。[一四]ギ
リシア語圏の者にも異言語圏の者にも、知者たちにもまた愚かな者たちにもわれ負うべ
き責めを持つ。[一五]このように、わが熱心はローマにいる汝らにも福音を伝えることで
ある。

[一六]というのも、われ福音を恥とせぬからである。なぜなら、福音はまずユダヤ人そ
してギリシア人にもすべて信じる者に救いをもたらす神の力だからである。[一七]すなわ
ち、神の義は福音において[ご自身の]信実に基づき信仰に対し啓示されている。そのこ
とはまさにこう書いてある、「信実に基づく義人は生きるであろう」。

[一八]なぜなら、神の怒りは天から、不義のうちに真理をはばむすべての不敬虔と不義
のうえに啓示されているからである。[一九]それ故に、神の知られるべきことがらは彼ら
に明らかである。なぜなら、神が彼らに明らかにしたからである。[二〇]すなわち、神の
見えざることがら、彼の永遠の力そして神性は世の創造から、被造物において思考され
るものであり、見て取られており、その結果彼らは弁解の余地なき者である。[二一]それ
故に、彼らは神を知りつつ神として栄光を帰し或いは感謝することがなかった。むしろ、
彼らは思いにおいて空しきものとなりそして彼らの悟りなき心は暗くされた。[二二]彼ら
は知者であると称し愚かな者となった。[二三]彼らは神の不朽の栄光を朽ちるべき人間の

そして鳥や動物そして這うものの像の似姿に変えた。
二四それ故に、神は、彼らの身体が彼らの心の欲望において自らのあいだで辱められるべく、彼らを不潔へと引き渡した。二五或る者たちは神の真理を偽りに取り換えそして創造者から離れ、被造物を崇拝しかつそれに仕えた。その創造者こそ永遠に褒め称えられるべき方である、アーメン。二六それ故に、神は彼らを恥ずべき情欲に引き渡した。というのも、彼らの女たちは自然の用を不自然なものに取り換えた。二七同様に、男たちも女との自然の用を捨てて互いに自らの欲のままに情欲に身を焦がした。男は男と恥ずべきことを行いそして自ら自分たちの逸脱に値する報いを受け取っている。二八彼らが知識のうちに神を持つことを識別しなかったほどに、神は彼らを相応しからざることを為すべく不適格の洞観に引き渡した。二九彼らはあらゆる不義で邪悪な悪しき欲望に満たされ、妬み、殺人、喧嘩、裏切り、卑しさに満ちた者である。三〇悪口する者、神を憎む者、高ぶる者、自惚れる者、傲慢な者、悪をたくらむ者、親に不従順な者、三一悟りなき者、不忠実な者、愛情なき者、無慈悲な者である。三二或る者たちは、このようなことどもを行う者たちは死に値すると、神の義しきことを知りながら、ただそれらを行うだけでなく、行う者たちを是認している。

第二章

それ故に、ひとよ、すべて裁く者、汝には弁解の余地がない。なぜなら、汝は他人を裁くそのことがらにおいて、汝自身を罪に定めているからである。というのも、汝裁く者は同じことを行っているからである。二しかし、われら知る、真理に即した神の審判がそのようなことを行う者たちのうえにあると。三そのようなことを行う者たちを裁きそして同じことを行っている汝ひとよ、汝は神の裁きを逃れると思うのか。四それとも汝は、神の憐れみが汝を悔い改めに導くのを知らずに、ご自身の憐れみの富と忍耐そして寛容を軽んじるのか。五汝の頑なで悔い改めなき心に応じて、汝は汝自身に怒りの日に、つまり神の義しき裁きの啓示の日に怒りを蓄えている。六「神はおのおのにその業に応じて報いるであろう」。七かたや、忍耐に即して善き業の栄光と名誉と朽ちざることを求める者たちに永遠の生命を報い、八他方、利己心から真理に服せず、不義に服する者たちには怒りと憤りがあるであろう。九ユダヤ人をはじめギリシア人にも、悪を働く人間のすべての魂に苦しみと災いがある。一〇しかし、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、すべて善を働くすべての者には栄光と名誉と平安がある。一一それ、神にはかたより見ることないからである。一二誰であれ律法なくして罪を犯す者は、律法なくして滅び、そして律法のうちに罪を犯す者は律法を通じて裁かれるであろう。一三というのも、律法を聞く者が神の前に義であるのではなく、律法を行う者たちが義とされるであろうからである。一四律法を持たない異邦の民が自然に律法のことがらを行う時、その者たちは律法を持たずにも自らに対し律法なのである。一五一六ひとは誰であれ自らの心のなかに律法の業が書かれてあることを証明するが、それは、或る日、神がキリスト・イエ

スによるわが福音に即してひとびとの隠れたことがらを審判するときであり、それは自らの良心が共同の証人となり、そして自らのあいだで互いに告発しまた弁明することによってである。

一七しかし、もし汝が自らをユダヤ人と称し、律法に安んじかつ神において誇り、一八その意志を知りそして律法に基づき教えつつ、重要なことがらを識別しているのなら、一九二〇知識と真理の型を律法のうちに持つ者であり、汝自身盲人の導き手、闇のなかにいる者たちの光、思慮なき者たちの教育者、子供たちの教師であると自認しているのなら、二一それではどうして他人を教えつつ自らを教えないのか。盗むなと説教しながら盗むのか。二二姦淫するなと語りながら姦淫するのか。偶像を忌み嫌いながら宮のものを奪うのか。二三律法において誇りながら、律法の違反を通じて神を侮辱するのか。二四というのも、まさにこう書いてある、「神の御名は汝らのゆえに異邦の民のあいだで侮辱されている」。二五すなわち、かたや、もし汝が律法を実践するなら、割礼は有益である。もし、汝が律法の違反者であるなら、汝の割礼は無割礼となったのである。二六だから、もし無割礼者が律法の義[の諸要求]を守るなら、その者の無割礼は割礼とみなされるのではないのか。二七律法を満たす生来の無割礼者が文字と割礼を媒介にしてはいるが律法の違反者である汝を審判する。二八なぜなら、外見上のユダヤ人がユダヤ人ではなく、また外見上の肉における割礼も割礼ではなく、二九隠れた姿におけるユダヤ人そして霊における心の割礼が[称賛される]、その称賛はひとびとからではなく神からのものだからである。

第三章

それではユダヤ人の優っているところは何かあるのか、或いは割礼者の強みは何かあるのか。二あらゆる点で大いにある。第一に、神の言葉が彼らに信任されたことである。三ではどうか、もし誰かが不信仰であったなら、その者たちの不信仰が神の信実を無効にするのか。四断じて然らず。神を真実とせよ、すべての人間を偽り者とせよ。まさにこう書いてある、「汝が汝の言葉において義とされるように、そして汝が審判されることにおいて勝利するように」。五しかし、もしわれらの不義が神の義を確立するなら、われらは何と語ろうか。怒りをもたらす神は不義ではないのか。人間的にわれ言うのだが。六断じて然からず。なぜなら、その場合には、神はいかに世を裁くのか。七しかし、もし神の真実がわが偽りにおいてご自身の栄光へと弥や優ったのなら、何故われなお罪人として裁かれるのか。八そしてわれらはこう中傷されているのではないのか、すなわち「善きことどもが来るために、われらは悪しきことどもをなそう」とわれらが語っていると或る者たちが主張しているように。審判がそのものたちにあることは正当なことである。

九それではどうか。われらは優っているのか。まったくない。すなわち、ユダヤ人もギリシア人もすべて罪のもとにあることをわれらは既に告発した。一〇それはまさにこ

う書いてある、「義人はいない、一人もいない。一一悟りあるものはいない。神をはげしく求める者はいない。一二あらゆる者は迷い出、同時に無益な者となった。善を為す者はいない。ただひとりさえもいない。一三彼らの喉は開いた墓であり、彼らは自らの舌で欺いた。彼らの唇のもとには蝮の毒がある。一四彼らの口は呪いと辛辣で満ちている。一五彼らの足は血を流すに急である。一六彼らの道には破壊と悲惨がある。一七そして彼らは平和の道を知らなかった。一八彼らの目の前には神への畏れがない」。

一九われら知る、律法が語りかけるのは、律法のもとにある者たちに告げることがらは何であれ、すべての口がふさがれそしてすべての世が神に服従するためであることを。二〇なぜなら、すべての肉は業の律法に基づいてはご自身の前で義とされることはないであろうからである。というのも、律法を介しての[神による]罪の認識があるからである。

二一しかし、今や、律法を離れて、神の義が明らかにされている、それは律法と預言者たちにより証言されているものであるが、二二神の義はイエス・キリストの信を通じて信じるすべての者に明らかにされている。というのも、[信じるすべての者のあいだに]何ら差異は存在しないからである。二三なぜなら、すべての者は、罪を犯したのであり、そして神の栄光を欠いているが、二四キリスト・イエスにおける贖いを通じてご自身の恩恵により無償で義とされる者だからである。二五二六神は彼をその信を通じて彼自身の血において償いとしてご自身の義の証示のために公に晒したが、それは、先に生じた諸々の罪に対する神の忍耐における軽減を介して、今という好機にご自身の義の証示に向けて、ご自身が義であり、さらにイエスの信仰に基づく者を義とするためである。

二七かくして、どこに誇りはあるか、排除された。どのような律法を介してか、業のか、そうではなく、信仰の律法を介してである。二八なぜなら、われらは、人間は業の律法を離れて信仰によって義とされると認定するからである。二九それとも神はユダヤ人だけのものであるのか。そうではなく異邦の民のでもあるのか。そのとおり、異邦の民のでもある、三〇いやしくも神はひとりであり信仰に基づく割礼者を、そしてその[業を離れた]信仰を通じて無割礼者をも義とするであろうなら。三一それでは、われらはその[業を離れた]信仰を媒介にして律法を無効にするのか。断じて然からず。むしろわれらは律法を確認する。

第四章

それでは、肉におけるわれらの先祖アブラハムが見いだしていたものは何であるとわれらは語ろうか。二というのも、もしアブラハムが業に基づき義とされていたなら、なるほど彼は誇りを持つ、しかし、それは神に対してではないからである。三実際、書は何と言っているか、「アブラハムは神を信じた、そしてそれが彼に義と認定された」。四働く者にはその報酬は恩恵によるのではなく、当然のものとみなされる。五しかし、働きのない者であり、不敬虔な者を義とする方を信じる者には、彼の信仰が義と認定さ

れる。六ダビデもまた神が業を離れて義と認定するところのその人間の幸福をまさにこう語っている、七「その不法が赦された者たちは幸いである。そしてその罪が覆われた者たちは幸いである。八主がその罪を認定しない者は幸いである」。九それでは、この幸いは割礼者のうえにあるのかそれとも無割礼者のうえにもあるのか。というのも、「アブラハムにその信仰が義と認定された」とわれらは語るからである。一〇それでは、彼はどのようにしてそう認定されたのか。彼が割礼のうちにあることによってか、それとも無割礼のうちにあることによってか。彼が割礼のうちにではなく無割礼のうちにあることによってである。一一彼は割礼者の印を受けたが、それは無割礼者における信仰の義の証印であり、彼自身が無割礼を通じて信じる者たちすべての父となるためであり、彼ら自身義と認定されるためである、一二すなわち単に割礼に基づく者たちにとっての割礼ある者の父であるだけではなく、無割礼のうちにわれらの父アブラハムの信仰の足跡を歩む者たちにとっても父となるためである。

一三なぜなら、アブラハム或いは彼の子孫に対する、自らが世の相続人であるという約束は律法を介してではなく、信仰の義を介するものだからである。一四というのも、もし律法に基づく者たちが相続人であったなら、信仰は空しいものとなっておりそして約束は無効とされているからである。一五なぜなら、律法は怒りをもたらすからである。しかし、律法のないところには違反も存在しない。一六それ故に、［相続人が］信仰に基づくのは、恩恵に即するためである、その結果、ただ律法に基づく者だけではなく、われらすべての父であるアブラハムの信仰に基づく者にとっても、すべての子孫に対する約束が確かなものとなる。一七それはまさに「われは多くの異邦の民の父として汝を立てた」と書いてあるとおりであり、その方の前で、彼は、死者たちに生命を与えそして存在しないものどもを存在するものとして呼び出す神を信じたのである。一八その彼は望みを超えていたが望みのうえに、自ら「汝の子孫はこのようになるであろう」と語られたことに即して多くの異邦の民の父となることを信じた、一九そして彼は、信仰において弱ることなく、自らの身体がおよそ百歳になっており既に死んだ状態となっていること、そしてサラの胎が不妊であることを認識した。二〇二一彼は神の約束を不信仰において疑うことなくむしろ神に栄光を帰しつつ、約束されたことはありうることでありそして為しうることであることを十全に納得しつつ、信仰により強められた。二二それ故に、彼には義と認定されたのである。二三「彼には認定された」とは彼自身だけのために書かれたのではなく、二四われらのためでもある、われらの主イエスを死者たちから甦らせた方のうえに信をおく者たち、その者たちに「認定されるということ」をそれは意図している。二五その彼はわれらの背きのために引き渡され、そしてわれらの義のために甦らされたのである。

第五章

かくして、われらは信仰に基づき義とされたので、われらの主イエス・キリストを通

じて神に対して平和を持している。二その方を通じてわれらは、そこにわれらが立ちかつ神の栄光の希望のうちに誇っているその恩恵に対して信仰において近づきを得ている。三それだけではない、艱難においてもわれらは誇っている、艱難は忍耐をもたらし、四忍耐は確かな陶冶を、確かな陶冶は希望をもたらすことを知っているからである。五しかし、希望は失意の恥を負はしめない、なぜなら神の愛はわれらに賜った聖霊を通じてわれらの心に注がれているからである。六なぜなら、キリストはわれらがまだ無力であるときに、時至って、不敬虔な者たちのために死んだからである。七というのも、誰かひとが義人のために死ぬということはほとんどないからである。実際、或るひとは善き恩人のためにあえて死ぬことがあるかもしれない。八しかし、キリストはわれらがまだ罪びとであるときわれらのために死んだ、そのことにより神はわれらにご自身の愛を示したのである。九かくして、今や、われらは彼の血において義とされたのであるから、さらに一層彼を通じて怒りから救われるであろう。一〇なぜなら、もし、われらは、われらが敵であったときに、神と、ご自身の御子の死を通じて、和解させられたのであるなら、さらに一層、われらは、和解させられたものとして、彼の生命において救われるであろう。一一しかし、ただそれだけではない、われらはその方を通じて今や和解を得たそのわれらの主イエス・キリストを通じて神において誇ってもいる。

一二それ故、ひとりのひとを通じて罪が世に入りそして罪を通じて死が入ったように、そのように、すべての者が罪を犯したが故に、死はすべての者に入ったのである。一三というのも、律法[が与えられる]までにも罪は世にあったのであり、律法が存在しないため罪は告訴されていないが、一四しかし、死は、アダムからモーセに至るまで、アダムの背きと同じ仕方で罪を犯さなかった者たちをも支配したからである。彼は来るべき方の型である。

一五しかし、罪過があるのと同様の仕方で、賜物もあるのではない。というのも、もしひとりの罪過により多くの者たちが死んだのなら、神の恩恵そして恩恵における贈り物は、ひとりのひとイエス・キリストの贈り物によってさらに一層多くの者たちに満ち溢れたからである。一六そして贈り物は罪を犯したひとりを媒介にしたもののごとくではない。なぜなら、一方ひとりに基づく審判は罪の定めにいたるが、他方多くの罪過に基づく賜物は義に至るからである。一七なぜなら、ひとりの罪過により、死がひとりを通じて支配したなら、さらに一層恩恵と義の贈り物の満ち溢れを受け取る者たちは、ひとりのイエス・キリストを通じて、生命のなかで支配するであろうからである。一八それ故に、かくして、ひとりの罪過を通じて罪の定めに至ることすべての人間におよぶように、そのようにひとりの義を通じて生命の義に至ることもまたすべての人間におよぶ。一九というのも、ひとりの人間の不従順を通じて多くの者が罪びとに定められたように、そのようにまた、ひとりの従順を通じて多くの者が義と定められるであろうからである。二〇しかし、律法が到来したのは罪過が増すためである。しかし、罪が増したそのところで、恩恵がさらに満ち溢れた、二一それは罪が死において支配したように、そのよう

にまた、恩恵が、われらの主イエス・キリストを通じて永遠の生命に至るべく、義を通じて支配するためである。

第六章

それでは、われらは何と語ろうか。われらは、恩恵が増すべく、罪に留まろうか。二断じて然らず。罪に死んだ者であるわれらがいかになお罪に生きるであろうか。三それとも汝らは知らぬか、キリスト・イエスのなかへと洗礼された者であるわれらは彼の死のなかへと洗礼されたことを。四かくして、われらは死のなかへの洗礼を介して彼と共に埋葬された、それはまさにキリストが父の栄光を介して死者たちから甦らされたように、そのようにわれらもまた生命の新しさのなかに歩むようになるためである。五なぜなら、もしわれらが彼の死の似様性（にようせい）に一致したものとなったのなら、復活のそれにもなるであろうからである。六われらは、われらの古きひとが共に十字架につけられたことを知っている、それはこの罪の身体が滅び、もはやわれらが罪に仕えることがないためである。七それはすでに死せる者は、罪から[離れ]義とされてしまったからである。八もしわれらがキリストと共に死んだなら、また彼と共に生きるであろうことをわれらは信じる。九キリストは死者のなかから甦らされてもはや死ぬことがなく、死はもはや彼を支配しないことをわれらは知っているからである。一〇なぜなら、彼が死んだ死とは、罪に対して一度限り死んだところのものであり、他方、彼が生きる生命とは、神に対して生きるところのものだからである。

一一かくして、汝らも自らが罪に対しては死んでおり、キリスト・イエスにおいて神に対して生きているものであると認定せよ。一二かくして、罪をして汝らの死すべき身体において、その欲望に従わすべく、王たらしめるな。一三汝らの肢体を不義の武器として罪に捧げるな、かえって、汝らは、あたかも死者から生きているものであるかのごとくに、自らを神に捧げよ、そして汝らの肢体を義の武器として神に捧げよ。一四なぜなら、罪は汝らの主人とはならないであろうからである。それ、汝らは律法のもとにではなく恩恵のもとにあるからである。

一五それでは、どうか。われらは罪を犯そうか、われらは律法のもとにではなく、恩恵のもとにあるのだから。断じて然らず。一六汝ら知らぬか、汝らが自らを奴隷として従がうべく捧げるその者に、死に至る罪のであれ、義に至る従順のであれ、汝らは汝らが服従するその者にとって奴隷であることを。一七しかし、神に感謝あれ、なぜなら汝らは罪の奴隷であったが、汝らが心から手渡された教えの型に服従し、一八罪から自由にされ義への奴隷とされたからである。一九われ汝らの肉の弱さの故に人間的なことを語る。なぜなら、汝らは汝らの肢体を不法に至る不潔と、不法に奴隷として捧げたごとく、今や汝らの肢体を聖さに至る義に奴隷として捧げたからである。二〇というのも、汝らは罪の奴隷であったとき、義に対しては自由であったからである。二一では、その

とき、汝らはいかなる果実を得たのか。それは今では汝らが恥としているものである。なぜなら、かのものどもの終局は死だからである。二一しかし、今や、汝らは罪から自由にされ神に仕えており、汝らの聖さに至る果実を持している、その終局は永遠の生命である。二三なぜなら、罪の支払いは死であるが、神の賜物はわれらの主イエス・キリストにある永遠の生命だからである。

第七章

それとも、兄弟たち、われは律法を知る者たちに語りかけているのであるが、汝らは知らぬか、律法がひとを支配するのは、そのひとが生きている限りの時であると。二なぜなら、既婚の婦人は生存している夫に律法により縛られているのだから。しかし、もし夫が死ねば、彼女は夫の律法から解放されている。三だからそれ故、夫が生きているあいだに、他の男のものになるなら「姦通者」と呼ばれるであろう。しかし、夫が死ねば彼女は律法から自由であり、彼女が他の男のものになっても姦通者ではない。四従って、わが兄弟たち、汝らも死者たちから甦らされた他の方のものとなるべく、キリストの身体を通して律法に死んだのであり、それはわれらが神に対し実を結ぶ者たちとなるためである。五われらが肉にあった時、律法を通じての罪の欲情が、死への実を結ぶべくわれらの肢体に働いた。六しかし、今や、われらは霊の新しさにおいてそして文字の古さにおいてではなく仕えるべく、われらがそこに閉じ込められたもののうちに死にその律法から解放された。

七それではわれらは何と言おうか。律法は罪であるのか。断じて然らず。しかし、われは律法によらなければ罪を知らなかった。なぜなら律法が「汝貪るな」と言わねば、われ貪りを知らなかったからである。八しかし、罪は戒めを通じて機会を捕らえわがうちにあらゆる貪りを引き起こした。なぜなら、律法を離れては罪は死んでいるからである。九しかし、われかつて律法を離れて生きていた。しかし、戒めが来るや罪は生き返った。一〇だが、われは死んだ、そして生命に至らす戒め自らが死に至らすものとわがうちに見出された。一一なぜなら、罪が戒めを介して機会を捕らえわれを欺きそれにより殺したからである。一二従って、かたや律法は聖なるものでありまた戒めも聖であり義であり善である。

一三それでは善きものがわれに死となったのか。断じて然らず。むしろ罪が善きものを通じてわれに死をもたらすことにより、罪が明らかになるためであり、罪が戒めを通じて著しく罪深いものとなるためである。一四なぜなら、われ知るからである、かたや、律法は霊的なものであると、だが、われは肉的なものであり罪のもとに売り渡されていると。一五というのも、われわが為すことを知らぬからである。すなわち、われ欲するそのことをわれ為さず、憎むそのことを為すからである。一六しかし、もしわれ欲せざることを為すなら、律法にそれが善きものであると同意している。一七しかし、今やもはや、われそれを為すにあらず、わがうちに巣食う罪が為す。一八なぜなら、わ

がうちにつまりわが肉のうちに善きものの宿らぬことを、われ知るからである。すなわち、善美を欲することはわれに備わるが、それを為すことがない。一九なぜなら、欲する善をわれ為さずに、欲せざる悪をこれわれ為すからである。二〇しかし、もしわれ欲せざるそのことを為すなら、もはやわれそれを為さず、むしろわがうちに巣食う罪が為す。二一かくして、善美を為すことを欲するわれにおいて、悪がわれに備わるという律法を見いだす。二二なぜなら、われ内なる人間に即しては神の律法を喜んでいるからである。二三しかし、わが肢体のうちに他の律法を見る、それはわが洞観の律法に対し戦いを挑んでおりそしてわが肢体のうちにあって罪の律法のうちにわれを囚えている。二四惨めだ、われ、人間。誰がこの死の身体からわれを救い出すであろうか。二五しかし、われらの主イエス・キリストを介して神に感謝[あれ]。それ故、かくして、われ自らかたや洞観において神の律法に仕え、他方肉において罪の律法に仕えている。

第八章

かくして、今や、キリスト・イエスにある者たちにはいかなる罪の定めもない。二なぜなら、キリスト・イエスにある生命の霊の律法が汝を罪と死の律法から解放したからである。三というのも、ひとが肉を介してそこにおいて弱くなっていたところの律法の[遵守し]能わぬことを、神は自らの子を罪の肉の似様性において遣わすことによって[為した]からである、そして罪に関して、肉のうちにある罪を罰したのは、四律法の義[の要求]が肉に即して歩まず、霊に即して歩むわれらにおいて満たされるためである。五なぜなら、肉に即してある者たちは肉のことがらを思い、他方、霊に即してある者たちは霊のことがらを思うからである。六なぜなら、肉の思いは死であり、霊の思いは生命と平和だからである。七それ故に、肉の思いは神に敵する、なぜなら神の律法に従わないからである、というのも従いえないからである。八しかし、肉にある者たちは神を喜ばすことができない。九しかし、汝らは肉においてあるのではなく、霊においてある、いやしくも神の霊が汝らに宿るなら。しかし、もし誰かキリストの霊を持たぬなら、その者は彼のものではない。一〇しかし、キリストが汝らのうちにあるなら、かたや身体は罪の故に死であるが、他方霊は義の故に生である。一一しかし、イエスを死者たちから甦らせた方の霊が汝らのうちに宿るなら、キリストを死者たちから甦らせた方は汝らの死すべき身体にも汝らのうちに宿る霊それ自身を通じて生を賜うであろう。

一二それ故、かくして、兄弟たち、われらは肉に対し肉に即して生きる義務ある者にあらず、一三というのも、もし汝らが肉に即して生きるなら、汝らは死ぬばかりだからである。しかし、もし汝らが霊により身体の働きを殺すなら、汝らは生きるであろう。一四というのも、神の霊に導かれる者である限り、その者たちは神の子だからである。一五なぜなら、汝らは再び恐れに至る奴隷の霊を受けたのではなく、われらがそのなかで「アッバ父よ」と呼ぶ、子としての定めの霊を受けたからである。一六御霊（みたま）自らわれら

が神の子たちであることをわれらの霊に共に確証する。一七もし、われらが子たちであるなら、われらは相続人でもある。かたや神の相続人であり、他方キリストと共同の相続人である、いやしくもわれらが共に栄光にあずかるべく、共に苦難にあずかっているのなら。

一八なぜなら、今という好機の苦難は、われらに啓示されるべく来たりつつある栄光に比して、取るに足らないとわれは認定するからである。一九なぜなら、被造物の切なる憧憬は神の子たちの出現を待ち望んでいるからである。二〇というのも、被造物は空しきに服したが、それは自発によらず、服従させた方の故にであるが、二一被造物それ自身が滅びへの隷属から神の子たちの栄光の自由へと解放されるであろうという望みのうえでのことだからである。二二なぜなら、われらはすべての被造物が今に至るまで共に呻きそして共に生みの苦しみのなかにあることを知っているからである。二三しかし、ただそれだけではない。霊の初の実を持つわれら自身も、子としての定めを、われらの身体の贖いを待ち望みつつ、自らのうちで呻いている。二四なぜならわれらは希望により救われたからである。しかし、見られる希望は希望ではない。というのも、誰が見ているものを望むであろうか。二五しかし、われらが見ないものを望むならば、忍耐をもって待ち望む。

二六しかし、御霊もまた同じようにわれらの弱さにおいて共に支えてくれる。なぜなら、われらは為されるべき仕方で何を祈るべきか知らないが、しかし御霊自ら言葉にならない呻きをもって執り成すからである。二七しかし、その心を探索する方は霊の思いが何であるかを知っている、御霊が聖徒のために神に対し執り成していることを。二八他方、われらは知る、神を愛する者たち、計画に即して召された者たちにはあらゆることが善きことへと協働することを。二九なぜなら、彼は予め知っていた者たちを、御子自身が多くの兄弟のなかの長子となるべく、ご自身の子の像と同じ形の者として予め定めもしたからである。三〇しかし、彼が予め定めた者たち、その者たちを彼は呼びだしもした。そして彼が呼びだした者たち、その者たちを彼は義ともした。しかし、彼が義とした者たち、その者たちに彼は栄光を与えもした。

三一それでは、われらはこれらのことに対し何と語ろうか。もし神がわれらの味方なら、誰がわれらの敵であるか。三二ご自身の子を惜しまず、われらすべてのために彼を引き渡したその方が、いかに彼と共にあらゆるものをわれらに賜わらないということがあろうか。三三誰が神に選ばれた者たちを告発するであろうか。神が義とする方である。三四誰が罪に定めるのか。キリストは死んだ、いやむしろ甦り、神の右にある方であり、またわれらのために執り成す方である。三五誰がキリストの愛からわれらを引き離すであろうか。艱難か、災害か、迫害か、飢餓か、裸か、危険か、それとも剣か。三六まさにこう書いてある、「お前の故にわれらは終日死に渡されている、われらは屠られる羊として認定された」。三七しかし、われらはこれらすべてにおいてわれらを愛する方を介して勝ち得て余りある。三八というのも、死も生命も天使も支配者も現在あるものも来

るべきものも諸力も、高きものも深きものも、他のどんな被造物も、われらの主キリスト・イエスにおける神の愛からわれらを引き離しうるものは何もないとわれ確信するからである。

第九章

われキリストにあり真実を語る、偽らない、わが良心が聖霊においてわれに証ししている、[二]われに大きな憂いと絶えざる痛みがわがうちにあると。[三]すなわち、われ肉におけるわが同族、兄弟たちのためにキリストから離され、自ら呪われてあることを祈ったのである。[四]彼らは誰であれイスラエル人であり、子の定めと栄光と契約と律法制定と礼拝と約束は彼らのものである。[五]父祖たちもそしてキリストも肉に即しては彼らからのものである。あらゆることのうえにある神こそ、永遠に褒め称えられるべき方である、アーメン。

[六]しかし、神の言葉が失墜したというごときものではない。なぜなら、イスラエルに基づく者たちすべてがイスラエルなのではないからである。[七]彼らはアブラハムの子孫であるが故に、彼ら皆がその子供であるのではない。むしろ「イサク[から生まれる者]において汝の子孫と呼ばれるであろう」。[八]すなわち、肉の子供たちが神の子供たちではなく、約束の子供たちが子孫とみなされる。[九]というのも、約束の言葉はこうだからである、「この好機にわれは来るであろう、そしてサラに子があることになろう」。[一〇]ただサラだけではない、レベカもまた同様であり、一人の男、われらの父イサクとの交わりにより懐妊している。[一一一二]というのも、まだ[二人の]子供たちが生まれず、彼らが何も善きことも悪しきことも為さざるなかで、選びに即した神の約束が業に基づかず、呼びかける方に基づき持続するために、彼は彼女に「より大きい者がより小さい者に仕えるであろう」と語ったからである。[一三]それはまさにこう書いてある、「われヤコブを愛し、エサウを憎んだ」。[一四]それでは、われらは何と言おうか。神の側に不正があるのではないか。断じて然らず。[一五]なぜなら、神はモーセに「われは誰であれ憐れむ者を憐れむであろう。そしてわれは誰であれ慈しむ者を慈しむであろう」と語っているからである。[一六]それ故、かくして、それは望む者のでも、駆ける者のでもなく、憐れみを持つ神のものである。[一七]というのも、書はパラオーに告げている、「われはまさにこのことのために汝を立てた。すなわち、われが汝においてわが力を証明するためでありそしてわが名が全地に告知されるためである」。[一八]だからこそ、欲する者を彼は憐れみ、欲する者を彼は頑なにする。

[一九]そのとき、汝はわれに言うであろう、「それでもなお何故彼は咎めるのか。というのも、彼の意志に誰が反抗してきたであろうか」。[二〇]人間よ、神に言い逆らう汝はいったい何者か。「造られた者は造った者に「何故汝はわれをこのように造ったのか」と言わないであろうか」。[二一]それとも、陶器師は同じ粘土のかたまりから或るものを尊い器に、或ものを卑しい器に造る権能を持たないであろうか。[二二]しかし、もし神が怒りを

示しそしてご自身の力を知らしめることを欲しながら、滅びにふさわしい怒りの器を大いなる寛容のうちに忍耐したのなら、二三そして栄光へと予め定めたところの憐れみの器のうえにご自身の栄光の富を知らしめるためにであるとしたなら、[どうであろうか]。二四その[憐れみの器である]者たちをそしてわれらをも、彼はただユダヤ人のみからではなく、異邦の民からも呼び出したのである。二五ホセアの書においても、彼はまさにこう語っている、「[われはわが民でない者をわが民と呼ぶであろう、そして愛されなかった者を愛された者と呼ぶであろう]。二六そして「汝らはわが民ではない」と彼らに語ったその場所において、それが起こるであろう。かしこにおいて彼らは生ける神の子供と呼ばれるであろう」。二七イザヤはイスラエルのために叫んだ、「たとえイスラエルの子供たちの数が海の砂のごとくであるとしても、残された者たちが救われるであろう。二八なぜなら、主は言葉を地上で確立しつつそして迅速にもたらしつつ、執行するだろうからである」。二九そしてまさにイザヤは既にこう語っている、「もし万軍の主がわれらに子孫を残さなかったなら、われらはソドムのごとくなったであろう、そしてゴモラのごとくにされたであろう」。

三〇それでは、われらは何と語ろうか。義を追求しなかった異邦の民が義を、しかし信仰に基づく義を獲得した。三一だが、イスラエルは義の律法を追求しながら、律法に到達しなかった。三二何故か。なぜなら、信仰に基づくことなく、あたかも業に基づくかのごとくに[追求]したからである。彼らは躓かせる者の石に躓いたからである。三三まさにこう書いてある、「見よ、われはシオンに躓きの石と妨げの岩を置く。そしてそのもののうえに信をおく者は辱められることはないであろう」。

第十章

兄弟たち、わが心の欲求と彼らにかかわる神への祈りは彼らが救いに至ることである。二すなわち、われ彼らに証言するが、彼らは神への熱心を持つが、それは知識に即したものではない。三というのも、彼らは神の義を知らず、自ら固有の義を確立することを追い求めており、神の義に服さなかったからである。四なぜなら、キリストは信じるすべての者に義をもたらす律法の終わりだからである。五というのも、モーセは律法に基づく義をこう書いている、「それらを為した者はそれらによって生きるであろう」。六しかし、信仰に基づく義はこのように言う、「汝は汝の心のなかで、誰が天に昇るであろうかと言ってはならない」。それはキリストを引き降ろすことだからである。七或いは「誰が黄泉に降るであろうかと言ってはならない」。それはキリストを死者たちのなかから引き上げることである。八しかし、それは何と言っているか、「言葉は汝の近くにある、汝の口のなかにそして汝の心のなかにある」。これはわれらが宣べ伝える信仰の言葉である。九すなわち、もし汝が汝の口において主イエスを告白し、そして汝の心のうちに神が彼を死者たちから甦らせたと信じるなら、汝は救われるであろう。一〇というのも、ひとは心で信じて義に至り、口で告白して救いに至るからである。一一とい

うのも、書は語っている、「すべて彼のうえに信をおく者は辱められることはないであろう」。[一二]なぜなら、ユダヤ人とギリシア人の差異はないからである。というのも、あらゆる者に同じ主がおり、彼に呼びかけるすべての者たちに豊かだからである。[一三]なぜなら、「主の名に呼びかける者はすべて救われるであろう」からである。

[一四]それでは、信じることのなかったその方にいかにひとびとは呼びかけるであろうか。聞くことのなかったその方をいかに彼らは信じるであろうか。しかし、宣教する者なしにいかに彼らは聞くのであろうか。[一五]しかし、遣わされなかったなら、いかにひとびとは宣教するのであろうか。まさにこう書いてある、「いかに麗しいことか、よきことを告げる者たちの足は」。[一六]しかし、あらゆる者が福音に聞き従ったのではない。というのも、イザヤは語っている、「主よ、誰がわれらの伝聞を信じたでしょうか」。[一七]かくして、信仰は聞くことから、聞くことはキリストの言葉を通じてである。[一八]しかし、彼らは聞かなかったのではないかと、われは語っているのか。いや、むしろ、「その者たちの声は全地に響きわたった。そして彼らの言葉は世界の果てにまで[及んだ]」。[一九]しかし、イスラエルは知らなかったのではないかと、われ語っているのか。誰よりもまずモーセが語っている、「われ汝ら異邦の民でない者たちのうえに嫉みを起こさせるであろう、悟りなき異邦の民のうえに汝らの怒りを抱かせるであろう」。[二〇]他方、イザヤは大胆でありそして語る、「われはわれを探し求めない者たちに見いだされた、われを尋ね求めない者たちに現れる者となった」。[二一]しかし、イスラエルに対して彼は語っている、「服従せず、言い逆らう民に、われわが手を終日差し伸べた」。

第十一章

それでは、神はご自身の民を見捨てたのではないか、とわれは語っているのか。断じて然らず。というのも、われもまたイスラエルである。アブラハムの子孫からの者であり、ベニヤミン族の者である。[二]神は予め知っていたご自身の民を見捨てはしなかった。それとも、汝らは、エリヤがイスラエルに対して神に訴えるとき、書がエリヤにおいて何と言っているか知らないのか、[三]「主よ、彼らは汝の預言者たちを殺し、汝の祭壇を破壊したのです。われのみ残されそして彼らはわが魂を求めています」。[四]しかし、応答は彼に何と言っているか、「われバアルに膝をかがめなかった七千人を」わがために「残した」。[五]かくして、今という好機においても、このように恩恵の選びに即して残りの者が生じたのである。[六]しかし、もし恩恵によるのであれば、もはや業に基づかない、というのも、[さもなければ]恩恵はもはや恩恵とはならないからである。[七]それではどうか。イスラエルは追い求めているそのものを獲得しなかったが、選ばれた者は獲得した。しかし、残りの者たちは頑なにされた。[八]それはまさにこう書いてある、「神は彼らに頑なさの霊を、見ることのない目を、聞くことのない耳を与えたが、それはまさにこの日にまで至る」。[九]ダビデもまた言う、「彼らの食卓は[彼らにとって]網となれ、また罠となれ、そして彼らの躓きまた報いとなれ、[一〇]彼らの目は見ることのない

闇となれ。そして彼らの背を常に曲がったものにしてください」。
[11]それでは、彼らは倒れるために躓いたのではないかとわれ語っているのか。断じて然らず。むしろ、彼らの罪過によって、救いが異邦の民のものとなり、彼ら自身を嫉妬させるためである。[12]しかし、もし彼らの罪過が世の富となりそして彼らの失敗が異邦の民の富であるなら、ましてや彼らの[救いの]充溢はどれほどのものであろう。
[13]しかし、われ汝ら異邦の民に語る。確かに実際、われ異邦の民の使徒である限りは、われわが務めを栄光あるものとする、[14]もしわれ何らかの仕方でわが[血]肉を嫉妬せしめそして彼らのうち幾人かを救うでもあろうなら。[15]なぜなら、もし彼らの拒絶が世の和解であるとするなら、彼らの受容は死者たちからの生でないとすれば、何であるのか。[16]しかし、[捧げものの]初の実が聖なるものであるなら、[その粉の]かたまりもまたそうである。また、もし根が聖であるなら、枝もまたそうである。
[17]しかし、もし枝の或ものどもたちが折り取られたが、汝、野生のオリーブでありながら、彼らのあいだに接木されそしてオリーブの豊かな根に共に与るものとなったのであるなら、[18]それらの枝に優越を誇ってはならない。しかし、もし汝が優越を誇るとしても、汝が根を支えているのではなく、根が汝を支えている。[19]そのとき、汝は言うであろう、「枝が折り取られたのは、われが接木されるためである」。[20]よろしい。彼らは不信仰により折り取られたが、汝は信仰により立っている。高ぶった思いを抱かず、むしろ畏れよ。[21]なぜなら、もし神が自然に即す枝を惜しまなかったなら、汝を惜しむこともないであろうからである。[22]かくして、見よ、神の慈悲と峻厳とを。かたや、峻厳は倒れた者たちのうえにあり、他方、もし汝が憐れみに留まるなら、神の憐れみは汝のうえにある、汝も切り取られるでもあろうからには。[23]しかし、彼らもまた、もし不信のうちに留まることがないなら、接木されるであろう。なぜなら、神は彼らを再び接木する力ある方だからである。[24]というのも、もし汝が自然に即す野生のオリーブから切り取られそして自然に反してよきオリーブに接木されたのであるなら、ましてや一層自然に即すこの者たちは自ら固有のオリーブに接木されるであろうからである。
[25]すなわち、兄弟たち、汝らがこの奥儀を知らずにいるのをわれ欲しない、汝らが自らのがわで賢くあることのないためである。すなわち、それはイスラエルにおける一部の頑迷化が生じたのは異邦の民の充満が到来するまでである、[26]そしてこうしてすべてのイスラエルが救われるであろうということである。それはまさにこう書いてある、「シオンから救う者が来るであろう、彼はヤコブから不敬虔を追い出すであろう。[27]そしてわれ彼らの罪を取り去るとき、これが彼らに対するわがほうからの約束である」。[28]かたや、福音に即しては、彼らは汝らの故に[神の]敵である、他方、選びに即しては、彼らは父祖たちの故に[神に]愛された者である。[29]なぜなら、神の賜物そして召命は変えられないからである。なぜなら、[30]まさに汝らかつて神に不従順であったが、今やこの者たちの不従順によって憐れみを受けたように、[31]そのようにこの者たちも、

今や汝らのものである憐れみによって不従順となったのは、彼ら自身も今や憐れみを受けるためだからである。[三二]すなわち、神があらゆる者を不従順へと閉じ込めたのは、あらゆる者を憐れむためである。

[三三]ああ、神の富そして知恵と知識の深さよ。彼の裁きはいかに究めがたくまた彼の道はいかに追跡しがたきことか。[三四]すなわち、「誰か主の思いを知っていたのか、それとも誰か彼の顧問官になったのか、[三五]それとも誰か彼に予め与えてそして彼から報いを受けるのであろうか」。[三六]なぜなら、あらゆるものはご自身からそしてご自身を通じてそしてご自身に至るからである。栄光は永遠に[神]ご自身にあれ、アーメン。

第十二章

かくして、兄弟たち、神の憐れみによりわれ汝らに勧める、汝らの身体を神に喜ばれる生ける聖なる献げものとして捧げよ、それは理性に適う汝らの礼拝である。[二]汝らこの世に同調するな、むしろ洞観の刷新により変身させられよ、かくして汝らは神の意志が何であり、善とはそして喜ばれるものそしてまったきことが何であるかを識別するに至るであろう。[三]すなわち、われに賜った恩恵を介してわれ汝らのうちのおのおのすべてに告げる、思うべきことがらを超えて思いあがることなく、むしろ神が各自に分け与えた信仰の量りに応じて、思慮深くあるべく思うように。[四]というのも、それは、まさにわれらはひとつの身体に多くの肢体を持つが、肢体すべてが同じ働きを持つことはないように、[五]そのようにわれら多くの者もキリストにあって一つの身体であり、一人に即して互いに肢体だからである。[六]われらはわれらに賜った恩恵に即して異なる賜物を持っているので、もし預言を持つならその信仰の割合に即して、[七]或いはもし奉仕を持つならその奉仕において、或いは教える者はその教えにおいて、[八]或いは勧めを為す者はその勧めにおいて、分け与える者は端的に、指導する者は熱心に、憐れむ者はほがらかに[賜物を用いよ]。[九]愛は偽りなきものである。悪を憎み、善に親しみつつ、[一〇]互いに兄弟愛において慈しみ、相互に尊敬において喜んでおり、[一一]熱心に怠けることなく、霊に燃え、主に従僕し、[一二]希望において喜んでおり、艱難において忍耐し、祈りに固着し、[一三]聖徒の必要において分担し、旅人のもてなしに勤めている。[一四]汝らを迫害する者たちを祝福せよ、祝福せよそして呪うな。[一五]喜ぶ者たちと共に喜び、泣く者たちと共に泣くこと。[一六]互いに思いを同じくし、高ぶった思いを抱かず、低き者たちと共にありつつ。汝ら自らのがわで賢き者となるな。[一七]誰にも悪に対して悪を報いることなく、あらゆるひとびとの前で善き事柄に配慮しつつ。[一八]可能なら、汝らのがわからはあらゆるひとびとと平和を保ちつつ。[一九]愛する者たち、自ら復讐することなく、むしろ怒りに場所を与えよ。まさにこう書いてある、主は言われる「復讐はわれにある、われ報いるであろう」。[二〇]むしろ、「もし汝の敵が飢えるなら、食べさせよ、渇くなら、彼に飲ませよ。なぜなら、こうすることによって汝は炭火を彼の頭上に積むであろうからである」。[二一]悪によって負かされるな、善によって悪に勝て。

第十三章

すべての魂は優越する諸権威に服従せよ。なぜなら、神によるのでなければ権威は存在しないからであり、現存するものどもは神により任命されているからである。[二]かくして、権威に反抗する者は神の定めに抵抗しているのであり、抵抗している者たちは自らに裁きを招くであろう。[三]なぜなら、支配者たちは善行に対して恐れであるのではなく、悪行に対してだからである。汝は権威を恐れないことを欲している。善をなせ、そうすることにより汝は権威自身から称賛を受けるであろう。[四]なぜなら、それは汝にとって善きことへの神の補佐だからである。しかし、もし汝が悪を為すなら、恐れよ。なぜなら、それはいたずらに剣を帯びているのではないからである。というのも、神の補佐は悪を為す者に怒りのうちに罰を与えるからである。[五]それ故に、単に怒りの故にだけではなく、良心の故にも服従する必然性がある。[六]実際、その故に汝らは税をも納めているからである。なぜなら、彼らがまさにこのことに献身している限り、神の従僕だからである。[七]あらゆるひとびとにその負うているものどもを与えよ、税を負うている者には税を、関税を負うている者には関税を、恐れを帰すべき者には恐れを、名誉を帰すべき者には名誉を。

[八]汝ら、互いに愛することのほか、誰にも何も負うてはならない。というのも、愛する者は他の律法を満たしているからである。[九]なぜなら、「汝姦淫するなかれ」、「汝殺すなかれ」、「汝盗むなかれ」、「汝貪るなかれ」、そしてたとえ何か他の戒めがあるにしても、それはこの言葉「汝の隣人を汝自身のごとくに愛せよ」により包摂されているからである。[一〇]愛は隣人に悪を働かぬ。かくして、愛は律法の成就である。

[一一]しかも、汝らは、この好機を、すなわち汝らが現に眠りから目覚める時であると知っている。それ、今やわれらの救いは、我らが信じた時よりもより近くにあるのだから。[一二]夜は過ぎ去った、日は近づいた。だから、われらは闇の業を脱ぎ捨て、光の武具を身に付けよう。[一三]われらは、日中にあるように慎み深く歩もう、酒盛りと酩酊によってでも、乱交と放蕩によってでも、争いと嫉みによってでもない。[一四]むしろ、汝らは主イエス・キリストを着よ、そして欲望どもへの肉の計らいを為すな。

第十四章

さて、信仰において弱い者を受容せよ、その諸疑念を裁くことなく。[二]かたや、或るひとはあらゆるものを食する信を持つが、他方、弱き者は野菜を食する。[三]食する者は食しない者を軽蔑してはならない。食しない者は食する者を裁いてはならない。なぜなら、神がその者を受容したからである。[四]他者に属する従僕を裁く汝は何者か。彼らは自らの主人に対して立ちまた倒れる。しかし、彼は立つであろう、なぜなら主は彼を立たせうるからである。[五]或るひとは或る日が或る[他の]日に対して、他のひとはあらゆる日を[重要であると]判断している。おのおのは自らの洞観において充全に納得せよ。

六その日に思いを寄せる者は主にあって思う。また、食する者は主にあって食する。なぜなら彼は神に感謝するからである。七また、食しない者も主にあって食しない、そして神に感謝する。なぜならわれらの誰も自らにあって生きることも、自らにあって死ぬこともないからである。八なぜなら、もしわれらが生きるなら、われらは主にあって生きる、もしわれらが死ぬなら、主にあって死ぬからである。かくして、生きるも死ぬるも、われらは主のものである。九なぜなら、キリストはこのことへと、死者たちと生者たちの主となるために死に、そして生きたからである。一〇しかし、汝の兄弟を裁く汝は何者か。或いは、汝の兄弟を蔑む汝もまた何者か。なぜならわれらはすべて神の法廷に立つであろうからである。一一すなわち、こう書いてある、「われは生きている、主は語る、すべての膝はわれに屈み、そしてすべての舌は神を褒め称えるであろう」。一二だから、かくして、われらのおのおのは神に自らについて申し開きをすることになろう。

一三かくして、われらはもはや互いに裁くことはすまい。むしろ、このこと、兄弟に妨げ或いは躓きを置くことのないよう、より一層吟味判断せよ。一四主イエスにおいてわれ知りかつ確信している、何ものもそれ自ら穢れたものはない、ただ何か穢れていると考えるかの者にだけ穢れている。一五というのも、もし汝の兄弟が食物の故に苦しめられるなら、汝は愛に即して歩んではいないからである。キリストがその者のために死んだそのかの者を汝の食物によって滅ぼしてはならない。一六だから、汝らの善きものが侮辱されることのないものとせよ。一七なぜなら、神の国は食することと飲むことではなく、聖霊における義と平和そして喜びだからである。一八というのも、このことがらにおいてキリストに仕えている者は神に喜ばれそしてひとびとにも認められるからである。一九だから、かくして、われらは平和のことがらまた互いに築きあげることがらを追い求めよう。二〇食物のために神の業を壊してはならない。あらゆるものは清い、しかし躓かせる仕方で食する者にはそれは悪である。二一肉食しないこと、飲酒しないこと、それにより汝の兄弟が躓くものでないものは良いことである。二二汝が汝自身の側で持つ信仰を神の前で持て。識別するそのことがらにおいて自らを裁かない者は幸いだ。二三しかし、もし食するさいに疑う者は咎められている、というのも信仰に基づいていないからである。信仰に基づかないことがらはすべて罪である。

第十五章

われら力ある者たちは力なき者たちの弱さを担いそして自らを喜ばすことのない義務がある。二われらおのおのは隣人に対し、築きあげに関わる善きことがらにおいて喜びを与えよ。三なぜなら、キリストもまた自らを喜ばすことをしなかったからである、むしろまさにこう書いてある、「汝を侮辱する者たちの侮辱がわがうえにふりかかった」。四というのも以前に書かれたことがらはわれらの教示のために書かれたからである、それはわれらが忍耐を通じてそして諸書の励ましを通じて希望を持つためである。五忍耐と励ましの神が汝らにキリスト・イエスに即して互いに同じく思うことを賜わるように。

六それは汝らが心を一つにして口を一つにしてわれらの主イエス・キリストの神そして
父に栄光を帰すためである。
七それ故に汝らは互いに受け入れよ、まさにキリストもまた神の栄光に向け汝らを受
け入れたのである。八なぜなら、われ言う、キリストは神の真実のために、父祖たちの
諸契約を証明すべく、九他方異邦の民が憐れみの故に神に栄光を帰すべく、割礼者に仕
える者となったからである。それはまさにこう書いてある、「それ故に、異邦の民のな
かでわれ汝に告白しそして汝の御名を歌わん」。一〇さらに彼は語る、「汝ら喜べ、異
邦の民、彼ご自身の民と共に」。一一そしてもう一度、「すべての異邦の民、主を褒め
称えよ、そしてすべての民をして彼を賛美せしめよ」。一二さらに今度はイザヤも語る、
「エッサイの根が生じるであろう、そして立ち上がる方は異邦の民を治める、異邦の民
は彼に望みを抱くであろう」。一三希望の神が、汝ら聖霊の力のなかで希望に漲るべく、
汝らを信じることにおけるあらゆる喜びと平安で満たし給うように。
一四わが兄弟たち、われ自ら汝らについて確信する、汝ら自ら善きもので満ち、あら
ゆる知識を十全に備えており、互いに教えあう力があると。一五一六われ汝らに幾分大胆
に書いたのは、神によりわれに賜った恩恵の故にわれ神の福音に祭司として仕えており、
異邦の民へのキリスト・イエスの宣教者であることを汝らが思い起こし、異邦の民の献
身が、聖霊のうちに聖別され、受け入れられるものとなるためである。一七だから、わ
れ、神に関わることがらについて、キリスト・イエスにあって誇りを持つ。一八一九なぜ
なら、キリストが異邦の民の従順へとわれを介して言葉と行いにおいて、徴と奇跡の力
において、神の霊の力において成し遂げたこと以外の何ものかをわれあえて語ることの
ないからである。かくして、われエルサレムからイルリコに至るまでの巡回においてキ
リストの福音を満たした、二〇しかし、キリストの御名が呼ばれた場所ではないところ
で、福音を宣教すべくこのようにすこぶる熱心であるが、それは他者の礎石のうえに築
くことのないためである。二一しかし、まさにこう書いてある、「ご自身について宣教
されることのなかったその者たちが見るであろう、そして聞くことのなかったその者
たちが理解するであろう」。
二二それ故にまた、われ汝らのもとに至るに多くの妨げを受けてきた。二三二四しかし、
今やこれらの地域にわれもはや場所を持たず、スペニアに赴くときはいつであれ、汝ら
のもとに至る望みを多年持している。それ、われ赴く途上にて汝らにまみえることを望
んでおり、そして一旦汝らと心の満ちるひと時を持ったなら、汝らによりかの地に送り
だされることを望んでいるからである。二五しかし、今、われは聖徒たちに仕えるべく
エルサレムに行く。二六なぜならマケドニアとアカイアのひとびとはエルサレムにいる
聖徒たちの貧者に何らかの貢献をなすべく心に決めたからである。二七というのも、彼
らはそうすることを選択したのでありまた彼らに負い目あるものだからである。なぜな
ら、異邦の民が彼らの霊的なものごとに与ったのなら、肉的なものごとにおいて彼らに
奉仕する義務を負っているからである。二八かくしてこのことを実現しまたこの果実を

彼らに証印したなら、汝らを経てスパニアに赴くであろう。二九しかし、われ知る、汝らに至るとき、キリストの祝福の充溢のうちに赴くであろうと。
三〇 兄弟たち、われわれらの主イエス・キリストを介してそしてまた霊の愛を介して汝らに勧める、神に対するわがための祈りの数々のうちにわれと共に結集するように。三一それはわれユダヤにある不従順な者たちから救出され、そしてエルサレムに対するわが奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなるためである。三二それは神の意志により汝らのもとに喜びのうちに赴き、汝らと共に元気を回復するためである。三三平和の神が汝らすべてと共にいますように、アーメン。

第十六章

われ汝らにわれらの姉妹、ケンクレアにある教会の執事プォイベーを紹介する。二汝ら聖徒にふさわしく主にあって彼女を受け入れ、そして彼女が汝らを必要とすることがらにおいて彼女を補助するように。というのも彼女は多くのひとびとのそしてわれ自らの援助者となったからである。
三キリスト・イエスにあるわが同労者プリスカとアキュラによろしく。四彼らはわが魂のために自らの首を差し出した、その彼らにただわれのみならず異邦の民のすべての教会も感謝している。五また彼らの家の教会にもよろしく。キリストへのアジアの初の実であるわが愛するエパイネトスによろしく。六汝らに対し多く労したマリアによろしく。七わが同胞にして囚人仲間アンドロニコスとイウニアスによろしく。彼らは使徒たちのあいだでよく知られ、われより先にキリストのうちにあった。八主にあってわが愛するアムプリアトスによろしく。九キリストにあるわれらの同労者ウルバノスとわが愛するスタキュスによろしく。一〇キリストにあって陶冶されたアペレースによろしく。アリストブーロスの家のひとびとによろしく。一一わが同族ヘーローディオンによろしく。ナルキッソスの家の主にあるひとびとによろしく。一二主にあって労苦しているトリュプァイナとトリュプォーサによろしく。主にあって多く労した愛するペルシダによろしく。一三主にあって選ばれたループォスによろしく、彼のそしてわが母によろしく。一四アシュンクリトス、プレゴン、ヘルメス、パトロバス、ヘルマスそして彼らと共にいる兄弟たちによろしく。一五プィロロゴスとイウリア、ネーレアそして彼の姉妹またオリュムパスそして彼らと共にいるすべての聖徒によろしく。一六互いに聖なる口づけにおいて挨拶せよ。キリストの教会すべてが汝らに挨拶する。
一七兄弟たち、われ汝らに勧める、汝らが学んだ教会から離れて分裂と躓きをもたらす者たちを警戒せよ。彼らから離れていよ。一八なぜなら、そのような者たちはわれらの主キリストに仕えることなく、自らの腹に仕えているからであり、またなめらかな語りとへつらいにより疑いなき者たちの心を欺いているからである。一九というのも汝らの従順[の消息]はすべての者たちに届いているであろうからである。だからわれ汝らを喜ぶ。しかし、汝らが善に賢くあり、悪に無垢であることをわれ望む。二〇平和の神が

すみやかに汝らの足下にサタンを砕くであろう。われらの主イエスの恩恵が汝らと共にあるように。

二 わが同労者ティモテオスが汝らによろしく、そしてわが同族ルキオスまたイアソンそしてソーシパトロスがよろしく。三 主にあってこの手紙を筆写しているわれテルティオスが汝らに挨拶する。二三 われと教会全体の家主ガイオスが汝らによろしく。町の出納係エラストスそして兄弟コウアルトスがよろしく。

（この試訳の基礎研究として、拙稿「『ロマ書』におけるパウロの意味論―ピスティスの二相…-」、『日本の聖書学』、第八号、pp.87-140、月本、大貫編、ATD・NTD 聖書註解刊行会、二〇〇三年一〇月、「トマスとルターにおける信仰と愛―徳と恩寵の両立可能性―」、中世哲学会編『中世思想研究』XLVII、pp.55-72、二〇〇五年九月、およびその同名の増補版『北海道大学文学研究科紀要』、第 117 号、pp.1-44(Left)、北海道大学、二〇〇五年一一月 参照。なお、この訳業には多くの方々から励ましと助言を頂戴しました。とりわけ、泉治典先生は訳業を詳細に検討くださり、誤りを指摘しまた多くの改良案を提示くださいました。記して心からの感謝を表します。（二〇〇八年六月改定））。